

子どもたちが「ありのまま」でいられる居場所づくりと自治的活動を展開しよう

◇分科会一日目の実践報告と討論の様子

報告者（共同研究者） 瓜屋 讓

（１）分科会参加者の学校地域の状況

・いわゆる「学力」向上といわれる政策の陰で、子どもたちに本当の豊かな学力を身につける取り組みが行われているのかどうか問題。一律の宿題では学力向上につながらない。進路は塾頼みで、保護者からも学校として何をやってくれるのか疑問が出されている。

・どの地域も、子どもたちが自立できるようにするためには何が必要かで悩んでいる。少子化や低学年からの生活の多忙化が進み、子ども同士が交われる条件が失われている。それに加えて、貧困、過疎、家族関係の変化など、地域特有の問題が浮かび上がってきている。

・わたしの住んでいる地域では、毎年学級崩壊が起きている。これは北海道の共通した状況なのか、どうして学級崩壊が起きてしまうのか、いろいろな地域の状況を聞いて考えてみたい。

・過疎化が著しい地方の高校は、入試の点数が最高ランクからかなり厳しい生徒まで格差が大きい。また、経済的にはほとん

どの生徒が奨学金をもらっている。このことが生徒それぞれの活動意欲や授業の受け方にも表れている。

(2) 中川真一「ウルトラ5」「『ひとりが好き』な子どもとどう関わっていくのか」

〈報告の概要〉

全校児童31名、教職員9名の学校である。気になるA子は、人との関わりが苦手なように見える。周りに合わせて行動することはできるが、自分から表現したり、発信することが困難なようだ。A子にとっていま必要なことは何か。

レポートの中で、A子についてわかっていることは、決まっているセリフをいったり、弟と話すときは自然な会話ができる。しかし、自由な場面ではほとんど会話はなく、話題がない。一輪車を得意とするが、やっているときも会話はなし。担任に対しては、突然に鉄砲で撃つまねや刀で切るまねをしてきて、応戦してやると喜ぶ。友達に対しては、責めるような突っ込みが多く、とくにやんちゃでにぎやかなE男に対してはその傾向が強いという。

そこで担任は、クラスの女子を交えてE男との付き合い方を話し合ったり、養護教諭と一緒に母親と話し合う場を設けたり、父親の意見を聞くなどの働きかけを始める。また、教職員にA子の状況を伝えて、関わりを広げることも進めていった。

その結果、学習発表会では一生懸命キーボードに挑戦したり、算数のわからないところを担当に聞くなど、自分から人に関わろうとする姿勢が出てきたという。

〈討論の様子〉

・ A子は、発達的に幼く、自分の興味・関心と周りの状況が違
うことを感じているのではないか。また、理解の状況や活動で
も他の子に比べて不十分であるとわかっている。自信を無
くしているように思う。

・ 今、小規模校、大規模子を問わず、学校の中の能力的なラン
クが明らかになっているため、見えない境界線ができていて、
ゆっくりありのままがいいという見方ができなくなっているの
ではないか。

・ 担任は拒否されていないので、鉄砲で撃つなどのこの子の表
現を受け止め、遊びに転化することで、この子の世界を周りの
子が理解できるように関係づくりを進めて行ってはどうだろう
か。

（２）響 太「やってみよう、触れてみよう」

〈報告の概要〉

地域は酪農地帯、1年生7名のクラスである。担任は、4月
のスタートから子どもたち一人ひとりを知るために、活動を仕
掛け、一緒に遊ぶなど触れ合いをメインに実践を始めている。
その中で浮かび上がってきたのが、コン太とユメ雄で、コン太
は、発音や構音に難があり、ユメ雄は、周りとのかわり方が
難しいという。

これに対して担任は、努力や頑張りをほめながら、大丈夫と
励ましていくことを方針に実践を進めている。コン太には、丁
寧な対話、ユメ雄には、かまう、触れるというように。

活動面では、7月の水遊びが盛り上がる。最初に、アスファルトに水で絵を描く、次に、水かけごっこということ、いつもみんなと一緒にやろうとしない二人も、スムーズに溶け込んで楽しんだ。また、クワガタの世話から始まった虫捕り、そして幼虫の飼育がほかの子どもたちと二人の共通の活動になっていったという。

〈 討論の様子〉

・ 図工のトラクターを描く授業、水遊び、幼虫の飼育で、コン太やユメ雄が生き生きと活動しているように、いまの子どもたちには経験不足を補う活動、感覚や視野を広げる活動が必要になっている。

・ スキンシップも重要で、他者と触れ合うことが少なくなっている。小さい子どもたちほど求めているのであり、それが安心感につながるように思う。

・ 高校生を見ていて、危険なものに触ってはいけないといった何でもマニュアル、頭でっかちになっていると感じる。そのメリットとデメリットを考えないと何もできなくなることや伝えていくことが大切。また、つながり方やモノとの関係も、ゲームやスマホなどリアリティのない世界に浸っているのでさびしい関係になっていて、もっと人と触れあうことを大事にしておく必要がある。

（3）富士直尚「学級通信を使った学級経営のすすめ」

〈 報告の概要〉

1 学年 7 クラスで全校 1000 名弱、大学進学者は 9 割とい

う高校である。授業も受験に対応していて、考えさせるよりは黙ってずっと聞いているパターン。当然、生徒の興味・関心は進学に向き、情報を求めてやってくる。

報告者は、そんな学校状況にあって、担任をするのはいつも不安が付きまとうという。それでも、せっかくの担任なんだから、クラスを安心できる居場所にするために、授業以外でもいろんなことを教えよう、伝えようと、「学級通信」を足掛かりに実践を展開していく。

学級通信は、生徒を主役にした話題、高校生として考えてほしいことをメッセージとして書いている。継続することを第一に考え、肩ひじを張らずに書く、ある意味自己満足でいいという。そして、生徒だけでなく、保護者にも伝えて学校や生徒の状況を知ってもらおう、また、家庭で話題にしてもらうこともねらいとしている。たとえば、「起きる」「身支度」などは自分でする、悩みがあったら相談に乗ってあげてということから始めて、ラインの使い方、学校祭の打ち上げなど、細部にまで及ぶ。また、学校への苦情は、かなりの部分誤解からきているので、それを解消するとともに、子どもを勉強だけで追い込むことがないように、本人の頑張りを支えてもらえるようにという願いも込められている。一番のねらいは、その中で、生徒を大人の感覚に引きずり込むことにあるようだ。

〈討論の様子〉

・高校の学級通信は、少ないのではないか。保護者からの反応は、「読んでいる」と「見ていない」に分かれる。生徒が保護者に渡していない場合も少なくない。しかし、これがないと子

どもの学校生活は見えないので、子どもを理解する手がかりになる。

・生徒の反応もまちまちで、読んでいる、いないがあるが、労働環境やホームレス支援などの情報は、これから社会に出る子どもたちにとって意味があるので、通信の役割は大きいと感じる。内容としては、詩や学級日誌は、問題ないが個人情報に関わるものは難しい。最近では、校長から「事前に見せろ」という圧力もある。

・教師としては、何をどう書くか、考えることで冷静になる。それで、一方的な指導をしない予防策になったり、自分は何を伝えているのか振り返ることもできる。また、生徒に対して、頭ごなしにモノを言える年代ではないので、「考えてみよう」と呼びかけることで、間をつくることができる。

◇分科会二日目の実践報告と討論の様子

報告者（共同研究者） 黒谷和志

（１） 暮津友善 「ウルトラ5」

〈報告の概要〉

特別支援在籍の子どもが全校で40名を超え、担当する特別支援学級の1年生には10名を超える子どもが在籍する。個々の子どもたちの発達要求に応える支援体制をどのようにして構築するかが課題であると報告された。

子どもの「わからなさ」や「できなさ」に寄り添うことを大

切にし、「わからなさ」や「できなさ」も受けとめられる中で、子どもはどんどんやりたがりになっていった。また、子どもたちもめることを厭わず、もめる中で他者とのかかわりを学ぶことが大切である。「俺が俺が」ともめる子どもたちに、「合意の仕方」を教え、子どもたちがもめる度に、お互いこんな風に言え合えばいいんだよと練習をくり返す中で、子どもたちの会話は少しずつ変わっていった。譲り合えたことをうんとほめていくことで、「譲ったらほめられて気持ちがいい」という感覚が子どもに身につき始め、トラブルも減っていったと報告されている。

〈討論の様子〉

・特別支援学級に非常に多くの子どもが在籍する中で、どのような支援体制（支援計画・教職員配置）が組まれているのか。また、交流学級との関係も含め、学校づくりをどのように進めていくか。

・子どもに指導が通るまで教師として譲らない方がいいのか、その子のよさを探しながら子どもと対話できる機会を見つける関わり方が求められているのか。

・高校における特別支援教育も重要な検討課題になっている。その子を理解し、支え合える関係を学級の中にどのようにつくっていくかが課題である。

・発達障害の場合でも家族に受けとめられると子どもは安定していく。子どもの発達課題を保護者とどのように共有していくかという視点も大切である。

(2) 中野丈「高校生の自治的活動を考える」学校祭の演劇発表を通じて」

〈報告の概要〉

市は財政破綻し、所得の低い家庭や複雑な事情を抱えた家庭が多く、貧困が子どもの生活を直撃している。また、授業はきちんと受けるが、学習への意欲と学習の定着状況の大きな個人差が生徒たちの中に存在する。

多くの生徒が地元の中学校から進学し、中学校でのやり方をそのまま使いながら生徒たちが自主的に活動をつくっている。一方で、教師がさらに意識的に生徒の取り組みに関わり、指導していくことで、生徒の学びを更に豊かにしていくことが今後の課題である。

演劇発表で生徒たちがつくるシナリオには、その「根底に『自分の存在価値』を求める青年の切実な願いがある」のではない。演劇を通して聞こえてきたのは、「いらぬ人間なんていない」という現在の高校生の叫びや願いであったと報告されている。

演劇は、生徒が人とつながることを実感できる有意義な取り組みと言える。しかし、授業時数確保のため、行事づくりや生徒の自主的な活動が切り捨てられていく現状がある。また、大進学や部活動のことを考慮し都市部に進学する生徒も多く、入学者が減少する中で、生徒の自主的な活動を生かし、小規模校のよさをどう学校づくりに生かすかも課題となっていると報告された。

〈討論の様子〉

・学習意欲や学習の定着状況に個人差があり、特別な支援を必要とする生徒もいる中で、参加することに困難さを持つ生徒の居場所や出番のある授業や活動をどのようにつくっていくか。

・地元に残りたいという思いを強くもつ生徒もいるが、地元で就職先を見つめる困難さもある。生徒が地域とつながり、地域に働きかける活動をどのようにつくっていくかも課題となってくるのではないか。

・教師が意識的に関わり指導していくことで、学校の中に生徒の自治がさらに根づいていく基盤がある学校ではないか。

(3) 「はじまりは、『何も感じませんでした』から」

〈報告の概要〉

Tは、他者との距離感やその場の雰囲気を上手く捉えることができず、無意識のうちに周りの子どもたちをいらつかせてしまふ。そのため学級の中では、Tを巡るトラブルが絶えなかつた。

「Tを巡るトラブルは、「Tの課題」ではなく「集団の課題だ」と子ども集団に投げかけ続け、「繰り返し、繰り返してトラブルの状況を伝え、子どもたちにTを通して集団や自分を見つめ直す対話・紙上討論をしてきた」と報告されている。四年時に担任に真っ向から反抗をくり返していた女子が、Tをはじめ課題を抱える男子を理解し、支えようとする存在となっていく。

教師の権力に頼るのではなく、子どもの自由な意見表明を保障し、子どもが多様なものの見方・考え方に会い、自己を見つめ直すことを通して、課題を抱える子どもと子ども集団との

つながりを作り出している。

〈討論の様子〉

・子どもの自己表現を抑圧しない場が求められているのではないか。本音のやりとりを大事にし、ぶつかり合いながら自他関係を学びとっていく場を保障することが求められているのではないか。

・「みんな仲良く」というスローガンのもと、子どもたちを一つの価値観でしぼり、「仲良し」を求めてしまうのではなく、子どもたちの迷いやイライラも含めて、多様な自己表現を保障していくことで、子どもたちの居心地のよさが生まれるのではないか。また、その中で多様な他者とのように関わるかを学ぶことが必要なのではないか。

・大人が決めてしまうのではなく、価値葛藤も含めて、子どもの思考をくぐらせることが求められているのではないか。子どもの世界で起こることは、子どもたちが折り合いをつけながら、子どもたちで決めることが大切なのではないか。

（４）「最後の３年間の初めの１年」

〈報告の概要〉

担任する中学一年生の学級には、支援学級の生徒、幼さの残る育ちそびれの男子、人間関係のトラブルを抱える女子がいる。班を話し合いでつくり、総括してつくり変える、また、班長会を意識して育てる取り組みをされている。さらに、学年協では学年の諸問題を話し合い、そこでの提案を受けた学級審議を行い、学年総会で審議・決定するなど、学年集団をつくり出す取

り組みも行われている。

学級の中には発達障害が疑われる生徒を巡ってトラブルが生じたり、当初から「障害者」といった言葉が飛び交っていた。そこで「色々な人がいていい学級」を追求されていく。パラリニック、ALS、セクシュアルマイノリティなどを紹介し、生徒に感想を書かせ意見交流し、教師が訴えたかったことは何かを書かせる授業を行われている。子どもトラブルを直接指導の対象とするだけではなく、子どもたちの多様な意見表明を承認しながら、自分たちの日常生活の中にある関係性や自分たちのものの見方を問い直す学びを構想されている。

また、このような学びを積み重ねていく中で、自分の性自認に違和感を感じる子どもが相談にやってくる。その子を巡るいざこざも子どもたちの間に生じるが、その子を一面的に見てしまわず、また大人としての価値観を押しつけるのでもなく、丁寧な対話を繰り返されている。

〈討論の様子〉

- ・ 中学校での特別支援教育の実態はどうか。
- ・ 子どもたちが学級を意識するしかけを教師が用意したり、教師が繰り返して生徒に学びや活動を呼びかけることで、生徒のつながりが生まれてきているのではないか。
- ・ 報告の中では、思春期にさしかかって、性自認に違和感を感じ、悩む生徒と出会われている。高校ではどのような実態があるか。また、他校種も含め、子どもたちにどのような学びを用意することが求められているのか。

最後に、道徳の教科化を巡る動向についても意見交流がなされた。競争主義的な関係や気遣いに満ちた関係の中で、子どもたちは息苦しさのため込んでいる。しかし、ゼロ・トレランスの動きに顕著に表れているように、子どもたちの声に耳を傾け、子どもたちの一つひとつの言動を「なぜ」と問うてみることも、生活の仕方や学習規律を一方的に押しつける指導の広がりもある。道徳の教科化にかかわっても、道徳的な価値を子どもに押しつけるのではなく、子どもの権利を尊重し、子ども自身が考え、判断する学びが求められる。また、生活の当事者として、子どもたちが自たちの生活を自分たちでつくりあげ、つくりなおしていく中で、共同して生活するために求められるものの見方や考え方を子どもたちが、自身が選び取っていく指導が求められるのではないかと議論された。